

忍者市を知る



— 忍者でもてなす春 —



今回はハイトピア伊賀にある三重大学国際忍者研究センターで忍者を研究するクバーソフ・フォードルさんに話を聞きました。

私が忍者に興味を持ったきっかけは様々ありますが、ハリウッドや香港の忍者映画などからの影響があったと思います。

幼い頃は忍者といえば映画などの登場人物のイメージでしたが、創作物ではない忍者を知り、忍者が日本のものであることを知りました。

そして、大学を選ぶ際に趣味を専門にしようと考え、サンクトペテルブルク大学の東洋学部に入りました。大学に入ってからには忍者の研究を中心にしようと考えていましたが、忍者に関する文献や資料があまり手に入らず、忍者が生きていた歴史的背景を知るために武士文化などについて学びました。

現在では忍者と修験道や山伏との関係性について

調べています。通説では、忍者は山伏から発展したと言われますが、具体的な根拠といえるものはありません。伊賀の四十九院の山伏が忍者に山伏兵法を教えたと言われることから、関係性があると言われてはいますが、これも根拠と言い切るには問題があると考えていますので、更なる研究が必要だと思えます。

今後は研究を進めると同時に、忍術に興味を持つ海外の人の中にも忍者と修験道のつながりに興味を持つ人は多くいると思いますので、研究を本にまとめたいと思っています。

私が思う忍者の魅力は、忍者は物語の中の存在ではなく、実際に存在した人たちであり、修行をして能力を高めれば、自分も忍者のようなことをできるのではないかなと思わせてくれるところです。また、能力を高めることは自己改善につながりますから、現代人にも生かせることなのではないでしょうか。

【問い合わせ】

観光戦略課 ☎ 22-9670 FAX 22-9695

伊賀の歴史余話

1

明治維新150年と伊賀

総務課歴史資料係では、市史編さん事業で収集した資料を後世に引き継ぐため、整理・保存作業を進めています。今年度から市広報で年4回、資料を整理するなかで分かった伊賀の出来事や貴重な資料を「歴史余話」として紹介していきます。

今年、明治元（1868）年から150年目の節目の年にあたり、各地でさまざまな行事が予定されています。150年前の伊賀では、戊辰戦争の幕開けとなる鳥羽・伏見の戦いで新政府軍に味方した藤堂藩が、新政府に対抗しようとする東北地方の諸藩を討討すべく軍勢を派遣していました。

この軍勢のなかには、伊賀の藩士や、無足人と呼ばれた郷士が含まれ、彼らのなかには日々様子を日記に書き留めた者がいました。そうした記録の一つに、藤堂藩の上級武士で、上野城の二之丸（現桃青の丘幼稚園）に屋敷を構えていた藤堂豊前家に伝えられた「東征御出陣中日記」（佐々木脩氏所蔵）があります。

この日記によると、藤堂豊前家の当主広立は、8月23日、大名小路（上野西小学校前の道）に整列した兵士を率いて出陣します。その後、津藩主高嶽から馬具などを頂戴し、27

日には津を出発します。

東海道を北上した広立らは、9月11日に小田原、22日には水戸、10月3日には仙台辺りまで進軍します。

さらに10月10日には、薩摩藩などと塩釜・松島近辺の残賊追討を命じられ、最後は秋田まで残賊を召し捕りながら軍を進めることとなります。

戊辰戦争で戦死した新政府軍の兵士を埋葬した全良寺官修墓地（秋田市）には、「伊藩」と刻まれた墓石が残されています。故郷から離れた東北の地で、戦死する者もいたようです。

伊賀の地でも明治2（1869）年に、戊辰戦争の戦死者を追悼するため「彰忠碑」が建立されます。この彰忠碑は、現在も上野城跡に残されていますが、そこには広立らよりもさらに遠く、戊辰戦争最後の戦いとなる函館戦争にまで従軍した伊賀の郷士の姿が記録されています。戊辰戦争が終結した後、伊賀にも文明開化の波が押し寄せ、人々の暮らしも急激に変化していきました。



▲彰忠碑

総務課歴史資料係

☎ 52・4380

FAX 52・4381